



三陸復興のシンボル、完全復旧まであと少し

発信!!
いわての
力こぶ

三陸鉄道株式会社
【支援企業紹介】宮古市

平成26年4月の完全復旧を掲げ、工事が急ピッチで進む三陸鉄道。三陸復興のシンボルとして注目を浴びる一方、震災前から続く赤字経営を解消すべく、鉄道以外での事業収益を目指すユニークな手法に注目が集まっている。絶大な知名度を利用し、新たな地域復興とも結びついた三鉄の戦略について、事業本部長の坂下政幸さんに伺った。

18年連続の赤字経営で得られた決して諦めない企業姿勢

「会社として生き残るため厳しい決断もしてきましたが、それだけではダメ。三鉄はこれから何をやっていくべきかを社員自らが考え、それを実行していかなければ」。

厳然とした決意表明でありながら、取締役事業本部長の坂下政幸さんの口調には、それすら楽しもうとするポジティブさがあった。東日本大震災で甚大な被害を受けながら、来年4月の全線開通にむけ復旧工事を進める三陸鉄道株式会社。しなやかでたくましく、決して諦めないその企業姿勢が今、被災地復興の大きな原動力になっている。

三陸鉄道の誕生は昭和56年(1981)。

沿岸を結ぶ三陸縦貫鉄道構想を実現すべく、県と沿岸市町村運営による第三セクター鉄道として設立された。翌年には国鉄から引き継いだ未開業区間の建設も終了し、北リアス線・南リアス線の営業が始まる。久慈市から釜石市まで総延長107.6キロメートルの鉄路は沿線住民の期待を乗せ、初年度から収入は黒字を達成。しかし乗客の減少に伴い平成6年から経営は赤字に転落、以来県や市町村からの運営資金を使い、赤字を解消する経営が続いた。

そこに発生した震災は、軌道をズタズタに分断し、橋梁や駅舎は流され、車両3台も使用不能となった。それでも震災発生5日後、三陸鉄道は久慈駅一陸中野田駅間で運行を再開、再起へと踏み出したのである。

オリジナルキャラクター開発で鉄道事業以外の収益を確保

今年4月3日には盛駅—吉浜駅間の運転が再開し、全線開通への道筋が見えてきた。だが平成6年から続く赤字は、今回の復旧によっても解消するとは考えられない。だからこそ三陸鉄道では今、独自の鉄道グッズの企画開発にも力を注いでいる。

きっかけは平成17年の「赤字せんべい」のヒットだが、現在は公式ホームページ内にオンラインショップも設置、取り扱い商品は80アイテムを超えるほど。震災後は年間4品目の新商品を目標に物産開発に取り組む。意外なのは、外部の商品アドバイザーの協力を得ながらも基本的なアイデアは社内ですべてなされていることだ。「出来るだけ開発費をかけず『思いついたらやる』のが当社の商品開発」と坂下事業本部長は笑うが、事業者だからこそ発想できる企

画が、新たな展開を生むことがある。

昨年4月に登場した「鉄道ダンシ」は、その最たるものだろう。多くの「鉄道もの」と違い女性をターゲットにし、キャラクターイラストは公募、人気イラストレーターによるデザインの後、野田畑駅と恋し浜駅の再開に合わせて「入社式」まで行った。このプロジェクトの開発費に、当センターのいわて希望ファンが活用されている。反響は大きく、震災復興商品として全国のイオンで販売されている三陸産ファスト・フィッシュのパッケージへの採用をはじめ、西武鉄道との共同による新キャラクターの誕生が今秋に予定されている。「当社にはパッケージやグッズ制作による使用料が入る。版元や製造元になるのが、鉄道ダンシを開発した時からの戦略でした」と、坂下事業本部長も手応えを語る。

復興に向け、自ら知恵を絞り行動する三陸鉄道。しかし本当の挑戦は、来年春、全線再開を果たしたのち始まる。

我が社の
力こぶ
はコレ!

完全復旧こそ地域と
支援者への最大の恩返し

鉄道マンにとって、震災直後の運行時に見たお客様の笑顔は最高の喜び。被災地では唯一目に見える形で復興が進む三鉄はまさに復興のシンボルなのです。全国からの支援への感謝と地域復興のためにも、我々は完全復旧で応えるしかありません。



取締役事業本部長
坂下 政幸

会社名 三陸鉄道株式会社
本社 岩手県宮古市栄町4
本電話 0193-62-8900
代表者 望月正彦
創業 昭和56年11月10日
従業員 61名
業種 鉄道事業・第2種旅行業・損害保険代理業・物品販売業
URL http://www.sanrikutetsudou.com/